

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	藤井 三和子
2. 審査委員	主 査：大前 敦巳 副主査：釜田 聡 委 員：安藤 知子 委 員：長谷川 哲也 委 員：太田 拓紀
3. 論文題目	高等学校における海外研修を通じた国際理解の資質・能力の育成—学校教育に求められる資質・能力との関連から—
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 藤井三和子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年2月1日（日） 13時00分～15時00分</p> <p>場所：ZOOMによるオンライン実施（ホスト：上越教育大学 人文棟大前研究室）</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章：研究の背景と目的</p> <p>本論文は、高等学校における海外研修の多様な形態とその広がりをふまえ、先行研究では十分に論究されなかった現行学習指導要領等の学校教育に求められる資質・能力（コンピテンシー）との関わりにおいて、高等学校の海外研修がどのような国際理解の資質・能力を育成しようとしているか、兵庫県公立高校の事例とスーパーグローバルハイスクール（SGH）およびユネスコスクール（US）の先導的事例から明らかにすることを目的とした。グローバル化の進展に伴い、英語を中心とする語学研修が重視される一方で、国際連合・ユネスコの提言を受けて日本国際理解教育学会等ではより広い国際理解の資質・能力が提示されている。両者の違いは、競争型と共生型の対比として整理され、そのどちらか一方ではなく組み合わせの度合いから各校の海外研修プログラムを分析し、先導的な実践者へのインタビュー調査を実施して、海外研修で育成する資質・能力の特徴を明確化する研究方法を採用した。</p> <p>第2章：国際理解に関係する様々な資質・能力論</p> <p>第2章では、国際理解の資質・能力が多様な文脈で議論されている実態をもとに、OECDのキーコンピテンシーとグローバルコンピテンス、ユネスコの「学習の5本柱」と持続可能な開発のための教育（ESD）、日本国際理解教育学会における4つの目標設定（知識・理解、技能、態度、体験）、現行学習指導要領における3つの柱（知識及び技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性）、日本の多文化共生における日本人性と異文化理解の観点から、国際的な枠組みの中で議論されている資質・能力論の内容と背景を整理した。</p>

### 第3章：兵庫県公立学校の事例から見た海外研修の意義と国際理解の資質・能力

第3章では、国際理解における競争型と共生型の資質・能力の対比から、兵庫県公立高等学校85校の海外研修を事例に報告書等の記述内容を収集・分析し、「語学研修型」「国際交流型」「探究・発信型」の3分類を用いて考察を試みた。「語学研修型」が51校（60%）で最も多く、主に英語圏諸国で実施しているのに対し、「国際交流型」は24校（28%）、「探究・発信型」は14校（16%）で少なく（重複含む）、近隣のアジア諸国で実施することが多かった。しかし、共生型の探究活動と競争型の英語発表の両方を備えた「探究・発信型」は、都市部の進学校を中心に行われており、語学だけに偏らないユネスコの地球市民教育につながる国際理解の資質・能力を育成していることを明らかにした。その背景には、高度な探究学習とそれを実践できる教員の確保、外部機関との連携が課題であることを指摘した。

### 第4章：高等学校の先導的な海外研修を通じた国際理解の資質・能力の育成—全国のスーパーグローバルハイスクール（SGH）とユネスコスクール（US）を事例として—

第4章では、全国の高等学校において先導的な海外研修を実施してきたと考えられるSGHとUSに着目し、そこでどのような国際理解の資質・能力を育成しようとしているか、新型コロナウイルス感染拡大前の2020年度までの実施報告書等の資料をもとに分析した。その結果、SGHの海外研修443件中、「探究・発信型」の海外研修は320件（72%）を占め、USの55件中では「国際交流型」が24件（44%）、「探究・発信型」が17件（31%）であった。SGHとUSの双方に認定されている15校の海外研修60件では、「探究・発信型」が52件（87%）にのぼり、地球規模の社会課題について協働活動で探究し、特にアジア諸国での課題解決に資する協働活動を通じて、英語で成果発表を行う資質・能力を育成していることを明らかにした。さらに、その先導的事例として筑波大学附属坂戸高等学校の教員にインタビュー調査を実施し、インドネシアでの国際フィールドワークにおいて、英語と最低限のインドネシア語を用いて現地でのコミュニケーション能力を高める「技能」だけでなく、アジアの一員であるという視点と共感性を生み出しながら「森林の持続可能性」をテーマに問題解決の行動を起こし、その限界を自覚する「知識・技能」と「態度」の資質・能力も教員が育成しようとしていることを明らかにした。

### 第5章：SGHとUSの双方に指定されている15校の海外研修のプログラム分析

第5章では、先導的な海外研修を実施しているSGHとUSの双方に指定されている高等学校15校を対象に、そのプログラム内容を分析し、どのように教育活動に位置づけられ、どのような国際理解の資質・能力を育成しようとしているか検討した。大部分が「探究・発信型」の海外研修であり、①成果の英語での発信を現地で行う活動、②現地での協働活動、③研究のフィールドワークを行う特徴が認められた。海外研修先は、欧米やアジア諸国など、各校の研究課題に合わせて選んでおり、言語はアジア諸国でも英語を使用していた。「探究・発信型」と言ってもその活動内容は各校の重点の置き方により、英語での発信に重点を置く実践や協働活動に重点を置く実践など異なる形態があることを明らかにし、競争型、共生型双方の国際理解の資質・能力を育成している様相が認められた。

### 第6章：先導的な海外研修を実施している高等学校2校の教員へのインタビュー調査の分析

第6章では、筑波大学附属坂戸高等学校の事例と神戸市立葺合高等学校の事例を取り上げ、前章で明らかになった先導的な海外研修の中で大半を占める「探究・発信型」海外研修の詳細を、高等学校2校の教員へのインタビュー調査を通して検討した。両校の比較から見てきたのは、同じ「探究・発信型」の先導的な海外研修であっても、資質・能力育成の強調点が学校の理念や教員の経験、教育観によって大きく異なるという事実であった。坂戸高校は、協働的・共生的な関係性の構築を中心に据える共生型の海外研修であった。他方、葺合高校は、言語力・発表力・課題探究を統合し、成果の社会発信に重点を置く競争型研修を行っていた。どちらの学校も海外研修の教育的意義を「技能の獲得」以上のものとして捉えており、単なる一過性の海外体験ではなく、学校の教育方針の理念やカリキュラムの中に位置づけられた実践としてとらえられ、国際理解の資質・能力の育成が、競争型と共生型の異なる志向性のもとで多様に構想されていることが明らかになった。

## 第7章：研究の総括

第7章は、第3章から第6章の分析結果を踏まえて、海外研修ではどの資質・能力を育成していると言えるか、学校教育実践の観点から研究の総括を行った。兵庫県の公立高等学校で最も多かった「語学研修型」は、競争型の国際理解の資質・能力を育成することに主眼を置いているが、現実的に短期間の研修で語学を習得することは難しく、言語技能の習得の観点から生徒や地域社会の要望にどのように応えていくかの課題があることを示した。「探究・発信型」は、競争型と共生型を統合し、地球規模の課題を自らの問題として捉え、協働的に取り組む姿勢を育む資質・能力を育成していたが、兵庫県では都市部の進学校に集中していることを明らかにした。そこで、全国的に先導的な海外研修を実施するSGHとUSに着目し、①課題の現地性と探究性が高く、学びが深い、②協働的活動により共生型の資質・能力が形成される、③英語を共同的な活動や発信の道具として活用している特徴を見出した。欧米よりも近隣のアジア諸国で現地の協働活動を通して、文化的多様性の理解、国際的相互依存の認識、当事者性、問題解決能力といった国際理解の資質・能力を統合的に育成することを目指していた。しかし、アジア諸国に行って英語を使い、コミュニケーションをとることやホームステイ先でも安全面などから英語が通じる家庭に滞在すると、教育環境や生活環境の恵まれた一部の人たちとの交流に留まり、現地の生の世界を理解できない可能性もある。また、本研究は、コロナ禍以前の兵庫県公立高等学校とSGH及びUSの先導的な海外研修から得られた知見であることと、海外研修を実施する教員の視点からの分析であり、実際に研修に参加した生徒の側からの視点が入っていない限界がある。今後の課題としては、語学習得を主目的としないアジア諸国での「探究・発信型」の海外研修を、一般の高等学校に広げていくためのネットワークの構築や学校組織や教員の意識改革や海外研修実施のための情報の集約や実際の海外研修に立ち会い、生徒の学びの検証が必要になる。上記の点を補足するために、補論では、コロナ禍を経たオンライン活用による国際交流と、ベトナムでの現地語通訳による市民型の大学スタディツアーの可能性について言及した。

## 2. 審査経過

論文公聴会における発表、質疑応答を通じて、本論文は、政府・国際機関・学会などで多様に提示されてきた国際理解の資質・能力を丹念に整理し、学習指導要領など学校教育に求められる資質・能力との関わりから、高等学校における海外研修の成果報告書・プログラムと先導的な実践をする教員へのインタビュー結果の分析に基づいて、そこで育成しようとする資質・能力の特色を明らかにしたことが理解された。在学期間中に新型コロナウイルス感染拡大により現地調査を行うことが不可能になったが、膨大な資料の収集と分析に真摯に取り組み、自立した研究能力を有することを確認した。資料とデータの分析は、各章で重複した部分もあり視点がわかりにくい面を指摘されたが、兵庫県公立高校とSGH, USの先導的事例における学校と教師の立場から、競争型と共生型の双方を取り入れた国際理解の資質・能力のあり方を提示できた点で、論理性と情報探索力を有すると判断できた。また、近年のグローバル化や教科横断的な探究が重視される中で、高等学校の海外研修を事例とした課題解決を導く提案ができた点で独創的な構想力があり、国際理解教育などの専門分野との関わりの中で、教育実践学に貢献するオリジナリティを有する論文内容であることが確認された。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、藤井三和子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。